



1. もうひとつの大切なこと
2. 本格的な原子力発電時代を迎えた日本
3. 渋滞する高速道路

1. 公害対策基本法の一部改正などに伴って、文部省は小・中学校の学習指導要領を改めることになった。「企業寄り」から「健康と環境保全へ」——公害教育の手直しである。関係法案が変わったので教科書も手直ししようという、まことに消極的な姿勢が気になるが、公害教育の一步前進であることには間違いない。ところで、小・中学生の教育については、もう一つ大事なことを盛り込むよう提案したい。

それは、知識、教養、技術などを身につけるにあたっては、どのような心がまえが必要かということ十分に徹底させることである。この数年来、「人生いかに生きるべきか」を大学で教えてくれるものと思いついて入っている学生や、技術を習得するには、レストランでフルコースの食事をとるように、他人にすっかりお膳立てして貰うことが前提条件であると頭から決めてかかっている若者がふえてきたが、わが国の将来を考えると全く肌寒い思いがする。

このような主体性を欠いた人間の氾濫は戦後の混乱した教育によるものであるが、これも一種の公害といってもよいであろう。産業公害は現在われわれが直面している非常に大きい問題であるが、「教育公害」も決して無視し得ない社会問題であることを指摘したい。 [J]

2. 日本原子力発電の敦賀発電所 32 万 kW が昭和 45 年 4 月に運転開始したのに引き続き、関西電力の美浜発電所 34 万 kW、東京電力の福島発電所 46 万 kW の本格的な発電炉が完成した。他の電力会社でも原子力発電所を目下建設中あるいはその建設計画を相次いで発表している。水力発電に代って昭和 30 年代から火力発電が電源開発の主役を果たしてきたが、原子力発電コストの低下、大量な重油の安定確保の困難性に加えて、最近では重油火力の亜硫酸ガス公害が社会的に深刻化してきたため、原子力発電に大きな期待がかけられるようになった。原子力発電所は設計上実際の危険はほとんど考えられないといわれるが、日本は被爆国のため、立地上の安全条件が満たされても住民の反対を受ける場合が多い。万国博とともに、はなやかに明けた 70 年とは違って代わり、今年の日元の新聞には、公害、自然保護などの環境問題が大きく取り上げられた。振幅が激しいのは日本の常といわれるが、この問題の取り上げ方はむしろ遅すぎている。この狭い国土で環境を保持しながら、エネルギーを確保するには、長期的視野のもとに腰をすえて取り組まなければならない問題が多い。 [C]

3. 首都高速道路 6,7 号線、計 17.8 km が、3 月中旬に供用開始される。

これで、同公団設立の当初の目的であった既定 8 路線がほぼ完成したことになる。最初の前定にくらべると多少の遅れはあるが、それに代って横浜羽田空港線が昭和 43 年に完成していることなどを考え合わせると、ほぼ順調に進んできたといえよう。

しかし、手放して喜べない面もある。同高速道路上での渋滞は慢性化しており、今回の 6,7 号線の供用開始はこれにますます拍車をかけるものと予想される。とくに、現供用路線と 6,7 号線との接続点である江戸橋インターチェンジに予想される渋滞は、最大の問題となっている。この解決策として、ノンストップがうたい文句であった高速道路上で、信号規制が行なわれようとしている。

そもそも首都高速道路網計画案は、自動車交通の円滑化をはかり、首都の機能の維持および増進に資することにあった。これは、すべての車がより早く・安全に目的地に達しうる状態をつくることであつたらう。しかし、異常なほどに急速に増加する自動車数に対応し切れぬ現状を踏まえるとき、立案者が想定した自動車とは・利用者とは何であったかを、より具体的に再検討する必要はないだろうか。

[S]